2011年 GNOBLE 5期生
東大文系 合格者ロングインタビュー

【出席者　※敬称略】

樫野　平	（かしの　たいら）	開成→文Ⅰ
鄭　悠野	（てい　ゆうや）	都立日比谷→文Ⅰ
直井　柊平	（なおい　しゅうへい）	筑駒→文Ⅰ
中島　慎太郎	（なかじま　しんたろう）	開成→文Ⅰ
納　朋子	（なや　ともこ）	桜蔭→文Ⅲ
眞鍋　朋子	（まなべ　ともこ）	香川県大手前→文Ⅲ
森　尚子	（もり　なおこ）	雙葉→文Ⅱ
山﨑　和人	（やまざき　かずと）	駒東→文Ⅰ

Q ：グノーブルを知ったきっかけは？

直井：中２の時に他塾のテストで、英語の成績が相当ひどくて一番下のクラスに相当する点だったんです。母親が「英語も塾に行きなさい！」と言い出してグノを探して来たんです。

山﨑：僕は、高１になったら英語と数学はどこか塾に行こうと決めていました。そこで中３の後半になって、友だちにリサーチしたところ「グノーブルはかなりいい」と太鼓判を押してくれたのがきっかけです。

森：　私も学校の友だちの推薦です。高２の夏に他

の塾の授業を受けてみたら、予習をして、ただ答え合わせをするやり方で、これだと飽きちゃうのでそこはやめました。でも東大を受験するには塾に入らないとと思い友達に相談したら「グノーブルいいよ」と勧められて、実際来てみたら「あ、いいじゃん」と思えてそのまま入りました。

眞鍋:私は浪人をするために香川県から出てきていたので、東京の詳しい塾事情は知りませんでした。上京して通い始めた予備校で、とてもよく英語ができる友だちができて「なんでそんなに英語ができるの？」と聞いたところ「グノーブルに行ってたから」という答えが返ってきて、初めてグノのことを知りました。

納：　姉（学芸大附→一橋商）がグノの卒業生です。中学のころ英語の成績があり得ないほど悪くて、姉から「グノなら絶対なんとかしてくれるはず！」と言われていたんです。そこでまず、英語を高１から学び始め、高２では現代文も受講して新高３になってからは数学でもお世話になっていました。

鄭：　高校受験の時にお世話になっていた塾の先生がグノの英語を勧めてくれたんです。とても信頼できる先生だったので、その言葉を信じてみようと思ったのがきっかけで、結局英数を受講していました。

樫野：僕は兄（筑駒→東大文Ｉ）の推薦です。兄は中山先生の英語と、行村先生の国語の信奉者でしたので、高１の冬に僕が「そろそろ塾に行こうかな」と言った時は、１も２もなくグノを強烈にプッシュしてくれました。英数国すべてグノでした。

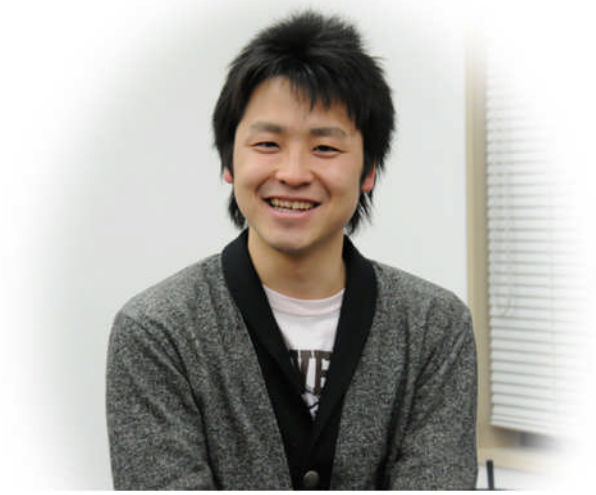
中島：中３の終わりごろに先にグノに入っていた学校の友だちに誘われて、高１から英語を受講しました。

Ｑ　：学校でのグノーブルの評判は？

樫野：学校では『グノ＝英語』でしたね。同級生はもちろん、先輩たちもグノで英語を学んでいる人が結構いましたし。でも、僕のように数

学や国語もグノーブルというのは珍しかったと思います。英語以外の教科については僕が広めていたようなところがありました(笑)。

中島:僕の印象では『英語』というより『中山先生』の評判が高かったような気がしますね。学校の実力テストでもグノ生が圧倒的に上位にいたので、中山先生の評判はどんどん上がって行きました。



鄭:　周りではあまり聞かなかったし、日比谷では僕1人だけ通っているんだと思っていました。ところがしばらくすると同級生でも通っていることが分かったり、実は先輩にもグノで英語を学んで東大に受かった人がいることが判明してきたんです。決して知名度が高かったわけではありませんが、いざ目を向けてみると“できる人はグノに通っている”という感じでした。

納:　高1のころはグノに通っている人が少なくて、通っている友だち同士で「グノっていい

よね！」と言い合っているくらいだったんです。ところが高３あたりになると、あちこちで「グノーブル」という名前が聞かれるようになったんです。最初に入った塾が続かなくて途中から転塾する人も随分いるんだなと思ったことがあります。

直井：僕自身が英語がすごく伸びたので、学校でもよく友だちにグノの話をしていました。でも、筑駒の場合、中学入学と同時に、あるいは高校に入ってからすぐ、多くの人は決まった東大専門受験塾に行く傾向があるので、他の塾の話題が出にくい環境だったと思います。でも、そこのやり方で力がつかなかった一年上の先輩が受験学年でグノに移ったらメキメキ力がついて、東大の本番でも９５点取って評判になっていました。

山﨑：うちの学校も最初は「グノーブルって何？」って感じでしたね。ところが僕が入って１年ほどたったころから駒東生がどどっと入っ

て、そのころから知名度が上がりました。僕らの学校でも東大専門塾に行く人が結構いましたが、「グノは英語が伸びる」という評判になっていました。

森：うちの学校では知名度もありましたし、評判も良かったです。ただちょっと『東大受験』というイメージが強過ぎて二の足を踏む人が多かったように思います。本当はそんなことないんですけどね。

Q ：塾を決める基準はどこ？

直井：授業が興味深いことが大事なことだと思います。僕がグノに決めたのも、そして、通い続けることができたのも、やっぱり授業が面白かったからです。つまらなければ自分からやろうという気が起こらないと思います。たとえば、グノだと授業の最初に演習やって、それを添削してもらうところから始まるので、これがいい力試しになるんです。授業の最初

にいつも「やるぞ」ってモチベーションが上がりましたね。

山﨑：普通の塾だと宿題をやってきて、前にいる先生が淡々と答え合わせと解説、というスタイルだと思うんです。グノだと教室全体で皆が参加していると感じられるんです。名前もすぐに覚えてもらえるし、演習の質と量もそろっていて、スピードも速くて、授業に緊張感がありました。

森：　やはり実際の授業を体験してみて決めることが大切だと思います。塾の中には噂と実態がぜんぜん違うということもあります。単に東大の合格者数を誇っていたり、有名校の生徒が数多く通うと言われる塾であっても、そこが自分にピッタリ合うかどうかは授業を受けてみなくては分かりません。たとえば私の場合、グノの冬期講習を受けてみて、周りの人のレベルの高さが手にとるように分かることが気に入りました。気の遠くなるぐらい優秀な人が一人とか二人とかじゃなくて沢山いました。周りの人が自分より実力が劣ってい

ると感じる環境だったら、調子に乗って「あ、もしかして私、できるかも」と勘違いしたかも知れません。それから、少人数制だからこういうことも分かるのだと思います。多くの人数の中に紛れてしまうと、先生も一方的に講義をするだけで自分で自分の相対的な実力を把握できません。

樫野：僕は先生を重視していました。僕の場合は、それに尽きます。

鄭：　先生との距離感です。僕は１度グノを離れて他の予備校に通ったことがあるのですが、常に不安がつきまといすぐに後悔するようになりました。大教室でやる授業は先生が一人ひとりに添削をしてくれるようなことはありませんし、自分の勉強の進み具合を把握してくれるようなことも一切ありません。そんなこともあって再びグノに戻ったという経験をしています。

納：中学受験の時に通っていた塾も少人数制だったので、私にとって塾というものは少人数制

であることが大前提となっていました。

中島：僕は結構周りの評判に流されやすいタイプで「いいよ！」と言われると「あ、そうなの」という感じで気持ちが動いてしまうので、グノにもそれで来たんです。でも、実際入ってみて思ったのは、中学からだと大学受験までは長い時間があるわけです。「それまで続けられるかな」って考えたんですけど、やっぱり「グノは続ける価値がある」と思えました。中３のときは関田先生でしたが、その頃からレベルが高くて意欲が湧く授業だったのでここで頑張ろうと思えたんです。

Q ：グノーブルの良かったところは？

樫野：演習中心の授業だったところです。多くの場合、予習をやってきてその解説をして授業はおしまいというのが他の塾や予備校の普通の授業なのですが、グノの場合は英語も数学も国語も演習を中心に授業が進められるところが決定的な違いであり、良さだと思います。そんな中で大きな気づきが随分ありました。

英語の場合、後ろから訳し上げるのが当たり前だと思っていたのですが、グノに入って「英語は頭から読みこなしていくものだ」ということを知って衝撃を受けました。実際にそれができるようになると、今までどれだけ非効率的な英文の読み方をしていたかが分かります。当然読むスピードも速くなって長文でもどんどん読めるようになっていきます。これは大きな成果だったと思っています。また僕の場合は、グノで学んで一番伸びた科目は国語でした。行村先生が提示される現代文の方法論というのは非常に明快で、どんな文章であっても行村先生の方法論に則れば安定した点数がとれるようになりました。古文や漢文は行村先生の人柄がよく出ている授業で、なにしろ楽しく覚えやすい、パワフルな授業でした。

中島：受験が終わったからこそ言えることですが、一番良かったのは、良い意味でグノは厳しかった、ということです。学校でも英語の成績は上位だったのにグノの授業ではいつも苦労

させられていました。本番ではしっかり手応えがあったので、グノの授業がどれだけ高度だったかを今更ながらに思い知っています。グノの授業についていけば、東大英語は楽勝です。グノ生ならきっと、誰もがそう思っているんじゃないでしょうか。

眞鍋：中学の頃は英語が得意だったんです。ところが高校になって徐々に成績が下がって行き…。自分では苦手意識は決してなかったのになぜか読むスピードも上がらず、点数が取れない、そんな状態が長く続いていました。でも、グノに入って、グノの授業内演習をこなし、宿題をやって、復習もやっていると、結果としてかなりの英文を毎週読むことになって、いつのまにか速読もできるようになりました。速読できれば東大のように深い設問を考えることに頭が使えて、それで得点力もついたと思います。

納：　グノの英語の場合、知識をちゃんと身につけ

ているかとか、読み込みをやっているかとか、先生にすぐばれちゃうんです(笑)。いちいち調べられるわけじゃないんですけど、毎回の添削を通してとか、授業中当てられるので、それで先生は私たちのことをお見通しなんです。当てられるのは、本当はイヤなんですよ。でも、当てられて答えられなかったり間違えたりするのはもっとイヤだから「頑張ろう」という気持ちにもなりましたし、添削でいただくコメントから、自分だけでは気づけないことに気づけたりって、良いことの方が多かったと思います。

鄭：　グノだと時間が上手く使えることです。予備校などだと時間が来れば授業はだいたいきっちり終わります。ところがグノの場合は授業の延長は普通です。時間よりも学習効果が優先されていて、１回の授業で完結するから学ぶべきことに集中できるし、復習もやりやすかったんです。あと、先日グノのテキストやプリントを整理していたら自分でも驚くほどの量だったんです。自分一人じゃこれだけ質

のそろった英文に触れるなんて絶対無理だったなと思いました。多分、どこの塾にも負けない質と量の英文を読んで聞いて、そしてどこよりも英作をたくさん添削してもらったと思います。

樫野：そして音読ですよね。グノでは「目の前の誰かに伝えるつもりで音読」というのを推奨していて、これはしっかり毎日実戦してました。直前期には音読しながら自分の声がリスニングの声のように感じるくらい読み込みました。

眞鍋：私も直前期は音読しかやっていませんでした。とくに長文の多い東大英語の場合、速く読んで正確に理解することが私の一番大きな課題だったので、私にとって音読は常に欠かせないものとなっていましたね。初めてみる英文も、音読のスピードで読める力がついたと思えたときは本当に嬉しかったです。

山﨑：僕は英語が苦手だったので、英文を前から読んで意味をとれるようになるまで苦労したんです。それをできるようにしてくれたのが、やっぱり音読だったと思います。黙読だとサ

ッと読めているようでいて、実のところ分からないところは読み飛ばしているんですね。ところが声に出して読むと読み流すことができないので、自分の分かっていないところが顕在化してくるというメリットがあります。また記憶が音として頭の中に残るのは、視覚的に記憶するより深く覚えられることを実感しました。

森: 「英語ってカラダを使って学ぶものなんだな」ということを私はグノで学びました。音読がしっかりできるようになると、英語のリズムがカラダに染み付くので、英語が英語のまま分かるようになるんです。今年の東大の穴埋め問題でも、自然に答が分かっちゃう感覚がありました。頭の中で答が勝手に

再生されて「あ、これだな」という感じなんです。これって、実際にグノの音声教材を使っての音読をやってないと分かっていただけないと思いますけど。

直井:そもそも英語を学ぶ本来の目的は使えるようになることですよね。そうした視点で考える

と、目だけで英文を追いながらどれだけ受験用の勉強をしたところで、本来の目的には近づけないわけです。グノの場合はこのあたりの発想が他の塾とはまったく違って、とことん使える英語を追求するというスタイルです。それを志向した次元の高い英語学習を受けられたことは幸せでした。もちろん当面の目標は東大合格でしたが、不思議なことに「受験勉強をしている」という感覚を持つことなく楽しみながら学べて、それでいて確実に力がついていました。

Q ：受験英語と使える英語の違いは？

中島：社会に出たら、受験問題が解けるだけの英語力じゃ仕方ないじゃないですか。受験が終わってからも個人的に次に向かう英語の勉強を始めていますが、グノで学んだことは間違いなく土台になっていくと思いますね。

納：　復習が音読やリスニング中心でしたから、日ごろから勉強をしていても英語を受験科目としてではなく言語として認識していたように

思います。友人などと日常的に会話をしている中で日本語では上手く言い表せないことがあった場合なども「あの英語の表現の方がピッタリだな」と思ったりすることもあって、英語がカラダに入っているというのはこういうことなのかなと思うことすらあります。この感覚を忘れずに持続する努力ができれば、確実に英語を自分のモノにできると確信しています。たぶん普通に受験勉強をしていたら、こうした感覚は持てなかったんじゃないでしょうか。

鄭：　今思うと中山先生の授業は、単なる英語の勉強ではなくて、英語を使っていろんな教養を学ぶ勉強だったんだなとも感じています。自分じゃ絶対に拾いきれないいろんなジャンルのトピックを毎週用意していただけるので、英語を学びつつも教養面でも幅が広がりました。また僕は、大学卒業後には国際的な視野を持って弁護士の仕事をしていきたいと考えているので、聞くことと話すことに加えて、書く力を養えたことが、今後の自分に大きく

役立つと思います。グノの英作は構文にあてはめて書いていくのじゃなくて、どんどん自分の考えを書いていき、それを添削してもらえるんです。英語で書きながら、音読で馴染んだ表現が自然に、次々出てくるのに気付いたときには、もの凄い力を授けていただいているんだと感動しました(笑)。

森：　実は私は、もともとは英語は苦手で、好きでもなかったんです。ところがグノに入ってからは受験勉強だけでなく、これからはあらゆる面で「英語はできなくてはまずい。できて当たり前」ということに気がついたし、やれる、という自信がついたので、今後も継続的に英語の勉強は続けて行こうと思っています。話すこと以外の力は、すでにグノで身につけられたので、今後は話すことにも力を入れた勉強をしていきます。

Q　：授業効果を上げるには？

鄭：　１度グノを離れた時、「これでいいのかな？」という疑問と不安を感じるばかりで…。グノ

の授業は確かにハードでしたが「これをやっていれば絶対に大丈夫」と思うことができました。つまり、信頼感を持てるんです。いい意味で英語はグノに丸投げするのがいいと思います。グノの教材以外は、実際に一切手を出す必要はありませんから。

納：　先生が私たちのことをよく見ていてくださいます。英語も数学も国語も、私の実力を一番よく分かってくれているのはグノの先生だと信じていけばいいと思います。

眞鍋：私は予備校時代の友達が大絶賛していた、中山先生の授業を受けたいと思ってグノを選びました。ところが入室テストでは基礎クラスだったので、最初は中山先生には教わることができず、クラス分けテストまでの２か月は、英語をかなり頑張りました。「上のクラスに上がりたい」というのがその頃の原動力でしたが、今になって思うと、それまでとは異なる、新しい勉強法で英語を頑張ったあの時期

に土台が整ったのだと思います。

中島：僕の場合も「上のクラスに上がりたい」というか「戻りたい」というのが一時期原動力でした。悪いのは僕自身なのですが、英語のクラスが最上位クラスのαから２つ下のα２まで急落したことがあるんです。塾をかわろうかという考えさえよぎりましたが、グノの英語指導は信じていましたし、本当に悔しくて「このままでは絶対に終われない」という気持ちが芽生え、そこからかなり気合を入れ直して頑張りました。グノの場合、受験学年でもクラス分けテストがあるから、１度αに入ったからといってのんびりしてはいられません。でも、グノの先生は決して冷淡じゃないですよ。同じ学校の友人はクラス分けテストでは上がれなくて、秋の全国模試で成績を上げ、それでクラスを戻してもらっていました。

森：　やっぱりやる気ですね。初めてαに入った時は、授業のスピードは速いし、周りの人はできる人ばかりだしで、自信喪失気味になっていました。そのころ本当は、α１に落として

もらいたかったんですけど「でも、ここで妥協したら負けかな」と思い、なんとか皆について行けるよう努力しました。私がグノで学ぶ支えとしていたものは、悔しさを跳ね返すやる気なんです。

山﨑：ここの授業を全部聞いて、全部吸収することができれば必ず東大に合格できるという確信です。

直井：忍耐強さじゃないでしょうか。たとえば音読が効果があると言われても、すぐにその効果が現れるものではありません。コツコツ頑張るにはそれなりの忍耐が必要です。実は、僕の場合、音読を毎日やれるようになったのは高３からなんです。中２からグノにいるのに(笑)。毎日やるのはしんどいですけど、そこを我慢してやり続けると、全国レベルでも負けない力が本当につくんで、先生の言うことを信じて辛抱強く続けることが肝心です。

Q ：東大を目指す後輩にアドバイスは？

直井：グノで英語を習っている以上、忍耐強く、音

読とここの授業の復習をしましょう。必ず伸びることは僕が保証します(笑)。あと、全ての科目についてですが、長時間やったからといって伸びるわけではないので、自分で正しいやり方を見つけて、濃い時間を集中して過ごすことが大切だと思います。

山﨑:やっぱりグノの先生を信じて音読と復習です。あと、計画性です。計画というのは、１日の計画であり、１ヶ月の計画であり、もっと言えば１年の計画です。おおまかでいいので、いつ、どこに自分はいる、という計画を立てて、それに向けて勉強することが大事です。

森：　諦めないことです。東大は最後に英語が待っているわけですが、私は他の科目でちょこちょこ失敗したんですが、英語がよくできたのでその分がチャラになりました。ですから、グノで英語を学んだ人は、最後に英語に賭けられるんだから、安心して諦めないで、粘り強くやればいいと思います。普段の勉強でも諦めないこと。難しい問題や苦手な科目から逃げていたら絶対に力はつかないと思います。

樫野：僕は現役時代に慶應に受かっていまして、とても迷ったんです。でも、やはり東大を諦めきれない気持ちがあって浪人することを決意しました。果たして自分と同じような後輩が出てくるかどうかは分かりませんが、事情が許すならば再受験を怖がらずに、最初に掲げた目標を諦めないで欲しいと思います。一番悩むのは、もう一年やって果たして東大に受かるかどうかなんですけれど、そういうときにも、グノの先生は僕たちをいつも見ていてくださるので適確に助言をしてくれます。現役生と同じクラスですけれど、浪人生でもグノはちゃんと面倒を見てくれますし、グノに通えば演習もできるし、本当に効果的な勉強ができると思います。

鄭：　僕は公立高校出身ですが、一貫高の人に比べると、どうしても学校で学んでいるカリキュラムに差が出ます。スピード的にも内容的にも。でも東大受験にはそのレベルが求められるんです。公立高校出身で東大を目指すなら早めに動いて自分に合った塾探しをすべきで

す。

納：　受験とは直接関係ありませんが、私の学校にはある塾の宿題ばかりやっていて学校の勉強を捨てている人が結構いました。それはちょっと違うんじゃないかなと思います。受験に使わない科目でも高校時代に学べることをしっかり学んで、その上で受験勉強に励むべきです。

眞鍋:自己分析ができるようになることが大切です。たとえ模試の結果が悪くても、なぜこの結果になったか、今自分がやるべきことは何なのかを客観的に見られるようになることが大事なことではないでしょうか。

中島:常に軌道修正することです。テストをして点が悪かったり、思うように成績が伸びないのは、何かしらやり方が間違っているからです。そうしたところを客観的に見つめて軌道修正しながら勉強していれば、いつの間にかゴールに着いていると思います。

2011年 **GNOBLE** 5期生　東大文系　合格者ロングインタビュー